

横山耐雪著出雲詩綜小伝（訳）

入谷仙介 訳注

はじめに

『出雲詩綜』（以下詩綜と略称）は、横山耐雪（明治元年1868—大正12年1923）の編した、出雲地方の漢詩の選集である。雑誌『剪淞詩文』（以下剪誌と略称）第一一編から第二〇編まで8回にわたって連載された。題名は清の朱彝尊（1629—1709）の『明詩綜』に倣ったものと思われる。全六巻、詩人197家、巻頭には村上琴屋の題字、信太淞北の序文、論詩絶句一五首、凡例を載せる。巻一は松江藩主及びその一族三家、巻二は幕藩時代前期の詩人五家、巻三は、幕藩時代後期の詩人二八家、巻四は、幕末から明治にかけての詩人八五家、巻五は明治大正、著者と同時代の詩人五六家、巻六は明治以後、他府県から出雲に来て、活動した詩人二〇家である。このうち、巻五に、目次には生田晩樵が見えるが、本文には無く、本文には内田措宜を収めるが、目次から欠落している。各詩人には、それぞれ漢文の小伝が付されている。

掲載誌である剪誌は剪淞吟社（以下剪社と略称）の機関誌である。大正6年（1917）5月に創刊され、昭和10年（1935）10月、第一四三編をもって停刊した。はじめほぼ隔月刊、後に月刊となった。剪社社員の作品を主とした漢詩を中心に、郷土漢詩の研究、郷土詩人の遺稿等を掲載、山陰地域の漢詩を研究する上で、貴重な資料である。完全にそろっている所は無いが、島根大学附属図書館、島根県立図書館、境港市立図書館にそれぞれ約3分の1が所蔵されている。3館のいずれにも無い一号を、某家所蔵の本により補った、全巻復原セットを入谷が、櫻木保氏の協力により三部作成、一部を架蔵するほか、島根大学附属図書館、島根県立図書館にそれぞれ一部を納めたので、今では全巻の利用が可能である。

剪社は明治36年、横山耐雪など八人の詩人により創設された漢詩結社であ

る。最初は単なるサロンに過ぎなかったが、大正期に入り、漢詩の衰退が顕著になるにつれて、漢詩振興の使命感が高まり、機関誌を刊行、組織を整備、山陰大詩会開催、郷土漢詩人の発掘・顕彰等に努力、大正末期の最盛期には東は東京から西は九州に至る、社員百数十人を擁する、全国的大結社に発展した。昭和に入り、漢詩の衰退はますます進行、昭和7年の社長村上琴屋の死をきっかけに、崩壊の一路をたどり、10年の剪誌停刊の後は、最後の主宰者、堀芙峰を中心とする、漢詩の小サークルとして、ほそぼそと存続したが、昭和16年、太平洋戦争によって、活動を停止、21年、芙峰の死によって、完全に消滅した。

編者、横山耐雪の伝は『明治百年島根の百傑』（昭和43年、島根県教育委員会編集発行、以下百傑と略称）に収める。本名重固、字は士静、通称は大蔵、仁多郡温泉村（現大原郡木次町北原）に生まれた。家は代々医師であったが、父の代に衰えて農業となった。耐雪は家業復興を志して、岡山医学校に学び、大原郡日登村（現大原郡木次東日登）で開業、傍ら漢詩の製作を楽しみとした。後、詩友と計って剪社を起し、漢詩の振興につとめた。大正6年以降は、幹事として剪社の事務を取り仕切る傍ら、剪誌の編集に当たり、剪社を支えて奮闘、過度の努力により、世を早めた。詩は清の王士禎（漁洋1634—1711）を学び、出雲地方の自然美を好んで詠じ、五言絶句、七言古詩に長じ、山陰第一の漢詩人とされた。郷土漢詩の研究にも心血を注ぎ、その成果は詩綜の他、『出雲詩人徴略』（以下徴略と略称）『出雲名勝詩文』『出雲十二家絶句』（以下十二家と略称）『出雲詩人年表』雨森精翁・長沢東海・楽浪兄弟の遺稿の編集等となり、いずれも剪誌に発表された。中でも、最も包括的で、集大成ともいべきものが、詩綜である。耐雪の詩集を『松心樹詩鈔』（二冊、昭和10年、横山元熙刊行）という。汲古書院『詩集日本漢詩』巻二〇に影印する。剪誌五八は耐雪追悼特集号である。

詩綜の小伝は極めて簡略であり、もともと伝記研究を主眼とするものではないので、疎漏であり、誤りも少なくない。しかし、二百人近い出雲地方の幕藩時代から大正にかけての知識人の伝記を集めたものであり、他には伝記資料が無いのではないかと思われる人物もあり、出雲郷土史、日本漢詩の資料として、

注解を付して訳文を提供することは無意味ではないと思われる。注解は語句の解釈よりも、参考文献を中心として、編者の欠を補うのを主とした。ただ、入谷の非力のため、十分に満足できるものとならなかったことを利用者各位におわびする。

詩綜は、連載が終わってから、単行書として刊行されたかどうかは不明である。ただし、連載の各回は雑誌からはずして製本すると単行書になるように編集されていて、このようにして作られたと思われる一冊本が、島根県立図書館・大阪大学附属図書館懐徳堂文庫の2箇所所蔵されている。中でも島根県立図書館本は編者耐雪の寄贈本であり、欄外に耐雪筆と推定される朱筆の校正が施されている重要な本であり、このたび底本としたのはこれである。ただ読者の便を計って、正体字はすべて常用漢字に改めた他、原文は島をすべて鳴としているが、島に改めた。見出しの下に収録の詩数を挙げてあるのは、入谷が補ったものである。文献の略称は、本文で既に挙げたものの他に次のものがある。

画人伝 島根画人伝 桑原羊次郎 昭和10年 島根県美術協会

儒林伝 島根儒林伝 谷口廻瀾 昭和15年 谷口廻瀾先生還暦記念刊行会
人物事典 伊藤菊之輔 昭和45年 私家版

医家列伝 島根県医家列伝 米田正治 昭和47年 今井書店

続医家列伝 続島根県医家列伝 米田正治 1978年 報光社

学芸史 佐野正己 松江藩学芸史の研究 昭和56年 明治書院

巻 一

松平大円公（詩五首）

松平氏の第七世、初めの名は治好、後に治郷と改む。心を文武に使い、治績大に挙がる。晩年禅を大鼻に学び、茶事をもって楽しみとなす。遂に一家の茶儀を創め、不昧と号す。文政元年（1818）卒す。年68。

注 ○信太淞北「不昧公佚事」（剪誌四・淞北夜譚）・『松平不昧公伝』
三巻、大正6年、松平家編集部、箒文社。『松平不昧』昭和41年、内藤

正中、今井書店。徴略・画人伝。

松平青藍（詩一首）

初めの名は貴道、小島侯信賢の養子となり、信進と改む。学を好みて古今に通ず。慈仁にして人を愛す。嘉永年間卒す。年30余なり。

注 ○徴略。

寛堂公子（詩二首）

名は直応、直指公の第二子なり。幼にして穎悟、東京に遊学して、西籍に通ず。明治44年（1911）没す。年57なり。

注 ○直指公 松江藩九代斎貴。 ○徴略。

巻 二

黒沢石斎（詩三首）

名は弘忠、字は有隣、また峰節・香堂と号す。伊勢の人、林道春に従いて学び、その薦めをもって、褐を松江に解き、禄を食むこと八百石、延宝六年（1678）没す。年57なり。著に『懐橘談』その他数種あり。

注 ○徴略・儒林伝・学芸史。

久城春台（詩一首）

父の宗立は尾張の人、医を善くして、加藤清正に仕う。後に高貞公の辟に応じて侍医たり、禄を食むこと三百石なり。春台家嗣を承けて侍医たり、医術精妙、人はおもえらく、扁倉の再生すと。草書は二王を学んで逸致あり。正徳五年（1715）没す。年70余なり。

注 ○高貞公 松江藩初代直政。 ○扁倉 扁鵲・倉公、史記にみえる古代の名医。 ○二王 王羲之・王献之。東晋時代の名書家。 ○信太淞北「春台久城翁年譜」(剪誌一)同上「久城春台翁伝」(剪誌二)・続医家列伝。

長沢東海（詩一三首）

名は学、字は素位、号は不怨斎、熊野の人なり。父の名は無忌、号は粹庵、伊藤仁斎に従い学ぶ。戸田侯辟して儒官となす。東海及びその弟楽浪、皆幼時に痘を患いて明を失す。粹庵これを教育し、並びに儒をもって聞こゆ。朝鮮の来聘するや、兄弟は客館に往きて、使臣とともに唱和す。東海は後に松平氏に仕えて儒官となる。享保十九年（1734）没す。年49なり。

注 ○熊野 出雲意宇郡（現八東郡八雲村） ○戸田侯 美濃大垣の藩主。
○「東海詩鈔」（横山重固鈔・剪誌二八）一八首、本書及び詩鈔に収めるのは、すべて朝鮮使節団との唱和詩である。松江市外中原町の長沢医院は、東海の子孫という。信太湍北「長沢粹庵伝」（剪誌一二）。徴略・学芸史。

長沢楽浪（詩九首）

名は主、字は行賤、また不尤所と号す。戸田侯に仕えて儒官となる。安永八年（1779）没す。年81なり。

注 ○「楽浪詩鈔」（横山重固鈔・剪誌二八）一六首、本書及び詩鈔に収めるのは、すべて朝鮮使節団との唱和詩である。徴略・学芸史。

卷 三

宇佐美瀧水（詩三首）

名は恵、字は子迪、南総の人。護園七子の一なり。天隆公辟して儒官となす。東都の邸に住む。宝暦十二年（1762）『輔儲篇』四卷を上つる。世子大円公召見して、親しくその説を問う。安永五年（1769）没す。年67なり。

注 ○護 護の誤り。 ○天隆公 松江藩六代宗衍。 ○服元立「宇佐美瀧水碑」（儒林伝）。徴略・儒林伝・学芸史。

宇佐美德章

名は明卿、瀟水の孫なり。

注 ○徴略・学芸史。

宇佐美鶴城（詩一首）

名は先、字は子鳴なり。

注 ○徴略・学芸史。

宇佐美尚（詩一首）

字は中行なり。

桃白鹿（詩九首）

名は源蔵、字は子深、石州河合村の人、林祭酒の門に学び、後藤芝山、紫栗山と、あい切劔す。講義の妙は海内第一と称せらる。褐を松江に解き、命を奉じて起ちて明教館教授となる。職に在ること40年、享和紀元（1801）没す。年80なり。著に『世説考』その他十余種あり。

注 ○林祭酒 林大学頭、幕府の学政を司どる。白鹿が入門したのは、三代鳳岡（1644—1732） ○後藤芝山 1721—1782。高松藩儒。四書五經に訓点を施した後藤点は有名。 ○紫芝山 紫は柴の誤り、柴野栗山を指す。1736—1807。昌平校教授、寛政の三博士の一人。 ○桃白鹿「寿蔵碑」（儒林伝）徴略・儒林伝・学芸史。養父東園の伝は後藤芝山「桃東園碑」（儒林伝・碑文5号）

横山雄飛（詩五首）

名は邦才、元風と称す。清廉の孫、宝暦年間、京師に遊びて、医を学ぶ。居を大東に移す。寛政元年（1789）没す。年47なり。

注 ○耐雪の曾祖父敬甫の兄、横山家第三世、徴略・医家列伝、同書には寛政二年没、年40とする。

积藕華（詩五首）

名は慈光、字は止道、関東の人、不老山現成院に住すること40余年、持律厳正、遠近徳を仰ぐ。詩をもって道光上人と交わる。文政六年（1823）寂す。年80なり。

注 ○不老山 鰐淵寺、平田市北方の山中の名刹。 ○詩集は『出雲詩綜補遺』（佐藤泰運編・出雲市立図書館所蔵）。信太湊北「积藕華伝」（儒林伝）。画人伝・徴略・人名事典

积聴松（詩二〇首）

名は日謙、字は道光、浪華の人、平田の法恩寺に居り、西山拙斎・菅茶山・頼杏坪等と交わる。文政十二年（1829）寂す。年84なり。『聴松庵詩鈔』五卷あり。

注 ○西山拙斎 1735-1798。備中の学者。 ○菅茶山 1748-1817。備後神辺の人。漢詩人として著名。 ○頼杏坪 1756-1834。広島の人。山陽の叔父。 ○聴松庵詩鈔 文政九年、京都汲古堂刊行。 ○法恩寺には墓が現存。同寺に写本で伝わる詩稿は無署名であるが、竹治貞夫氏によって道光のものと推定された。昭和3年、剪淞吟社は百年忌記念詩会を開催、剪誌八三を記念特集号としている。岩波書店『日本古典文学大系89 五山文学集江戸漢詩集』に詩四首を収める。 木村雅寿「积道光碑」（剪誌八三・儒林伝）。徴略・十二家・人名事典・学芸史。

桃西河（詩一首）

名は世明、字は君義、従いて白鹿に学び、刻苦すること十余年、白鹿子無く、養いて嗣となす。京師に遊学して、柴栗山・皆川淇園・江村北海諸家の門に入る。のちにまた東都に遊びて、林祭酒に事う。諸家皆推重す。白鹿没して、教授となる。文化七年（1810）没す。

注 ○皆川淇園 1734-1807。京都の学者。 ○江村北海 1713-1788。

京都の学者。『日本詩史』の著者。○儒林伝桃白鹿に附す。園山西山「桃西河墓銘」(儒林伝)。人名事典・学芸史。

横山寂突(詩一首)

名は豊清、雄飛の弟、京師に遊びて医を後藤慕庵に学ぶ。池大雅と交わりて、神農の像を画きて贈らる。寛政元年(1789)没す。年71なり。

注 ○池大雅 1723-1776。京都の南画家、奇人として著名。

園山西山(詩二首)

名は雄、字は叔飛、また文恭と称す。初め桃白鹿に学び、のち従いて宇佐美瀧水及びその門人小川豊州に江戸に学ぶ。藩公の侍講となりて、江戸に祇役す。晩に明教館の祭酒となる。文政四年(1821)没す。年67なり。著に『稽古図説』その他十余種あり。

注 ○田村寧我「園山西山碑」(儒林伝)。徴略・人名事典・学芸史。

釈空谷(詩四首)

名は海印、一名は智穀、字は法輿、松江の人、朝日山に住す。京都の大通寺の山主、迎え請いて慈眼院に主たらしむ。天保中、仁和の法王請いて移りて南勝院に住せしめ、号を摩尼院と賜う。五年(1834)寂す。年69なり。学徳一世に高く、また詩書を善くす。

注 ○仁和法王 京都仁和寺の住職は、歴代法親王が任ぜられた。○沙門諦観「釈空谷碑」(儒林伝)。徴略・画人伝・人名事典。

水谷維善(詩一首)

字は子周、松江の世臣なり。

注 ○徴略。維は徴略に惟に作るのが正しい。

田村寧我（詩九首）

名は令終、字は子朗、水谷維善の弟、園山叔飛と馬鄭諸家の説を講明し、尤も思いを三礼・論語につくす。字を書ること高妙にして、群体を綜べ、渾融して迹無し。嘉永二年（1849）没す。年82なり。

注 ○馬鄭 馬融と鄭玄、後漢の經学の大家。 ○三礼 礼記・周礼・儀礼。 ○妹尾精齋「田村寧我碑」（剪誌三二・儒林伝）。人名事典、同書は嘉永四年没。

横山青藍（詩五首）

名は宗甫、元造と称す。清廉の玄孫、中西深齋に従いて医を学び、居を三刀屋にトす。また佐和宗太郎に従いて、經史を似ぶ。舊命を奉じて、毎月書を松江に講ず。弘化二年（1845）没す。年73なり。

注 ○似 学の誤りであろう。 ○舊 藩の誤りであろう。 ○雄飛の孫、寂突の甥。徵略・医家列伝。

海野紫瀾（詩五首）

名は彬之、字は子彬、松江の藩士、学を桃白鹿・古賀精里に受け、後に広瀬藩の儒臣となる。天保十二年（1841）没す。年68なり。

注 ○徵略・人名事典・学芸史。

山本鷓寮（詩一首）

名は良阜、字は景岐、松江の藩学、在濟館の教授、尤も本草に精なり。蒹葭堂深く推服す。鷓寮つねに書を寄せて疑いを質す。嘉永年間没す、著に『出雲風土記物産考』あり。

注 ○蒹葭堂 木村氏。1736-1802。大坂の博物学者。 ○徵略。

松原東皐（詩一二首）

名は和、松江の人、安永九年に生まる。著に『舒嘯軒詩集』あり。

注 ○徵略・十二家。

園山芸（うん）窓（詩二首）

名は清、字は子纓、酉山の長子なり。少年にして学に力め、桃黄園とあい切劇す。學術湛深、兼ねて文藻を善くす。文化十三年没す。年37なり。

注 ○徵略。

水谷仙峰

維善の男、天保七年に生まる。20余にして死す。

山村黙斎（詩一首）

名は良顯、字は子顯、松江の藩士なり。従いて白鹿・西河に学び、紫瀾に代わりて広瀬の儒臣たり。程朱の学を奉ず。安政六年没す。年72なり。

注 ○徵略・人名事典・学芸史。

伊藤宜堂（詩五首）

名は雅言、字は俊蔵、また不及斎と号す。伯州江尾の人、江都に寓游すること十四年、島田元且・菊池五山・朝川善庵等と、切磋す。石見に赴きて、大森の邑宰根本氏に聘せらる。次いで雲州塩冶村に移り、居ること30年、一郡翕然として学に嚮う。後に鳥取侯の命によりて、二部溝口の郷黌を督す。明治4年、江尾に没す。年83なり。最も易学に精しく、『周易包蒙』五十卷あり。

注 ○菊池五山 1772-1855。讃岐高松の人。江戸に出て、漢詩人として盛名があった。○朝川善庵 1781-1849。折衷学派の学者。○三島中洲「伊藤宜堂遺徳碑」（剪誌一二・儒林伝）。徵略・儒林伝・人名事典・学芸史。

三刀舜朗（詩三首）

字は巨川、号は雪卿、頓原の人、横山青藍に学びて易を究む。後に従いて菅

茶山・後藤栗庵・頼山陽等に学び、医をもって広瀬藩に仕う。嘉永七年没す。年64なり。

注 ○頼山陽 1780-1832。広島の人、京都に住み、詩文に名声が高かった。

大沢篤（詩一首）

頼山陽の門人なり。

注 テキストは篤を草冠に誤る。

田代月華（詩二首）

名は文祥、字は修卿、養浩外史、霞洲医史、静余斎、洗心庵等の別号有り。田村寧我の門人、松江藩の医官なり。

注 ○徴略。

清水南山（詩七首）

名は柔則、字は伯翼、また醉翁と号す。松江の世臣、著に『三清堂詩草』有り。

注 ○徴略。

塩野敬直（詩二首）

松江の世臣、父子を蘭亭という。父子ともに生田好好に従学す。

注 ○父子を 子は衍字。徴略には無い。 ○生田好好 塩野敬直「生田好好碑」（儒林伝）。徴略。 ○徴略。

信太子元（詩一首）

名は謙、字は子元、原田子求に師事し、園山伯亀、井山子龍とあい切磨す。儒員に列し、命ぜられて、江戸に游学し、兼ねて邸中の子弟を誨う。幾くもなく、病を得て帰郷し、文久二年（1862）没す。年57。その学は経術をもって長

を見わす。詩文にははなはだしくは心を用いず。

巻 四

釈苔洲（詩二〇首）

名は天鱗、字は縦壑、また笠津・石窓・三蕉の別号有り。松江永原寺の主なり。初め田村寧我の門に入り、のち、釈雲華に従う。晩年、家塾を立てて淡成舎と称す。明治24年（1891）没す。年85なり。『淡成舎遺稿』若干卷有り。

注 ○淡成舎遺稿 全巻が伝わっているかどうか未詳、島根県立図書館に『淡成舎遺稿一斑』二冊（明治40年刊）を蔵する。○小栗栖香頂「天鱗法師碑」（一斑・剪誌三・儒林伝）。十二家・人名事典。

北尾徳庵（詩一首）

松江藩の侍医、年70余にして没す。

神谷春窓（詩一首）

源五郎と称す。松江藩の大夫、明治の初めに没す。年六十余なり。

山村南陔（詩一首）

名は良実、字は子純、黙齋の長子、広瀬藩の儒学教授、万延元年（1860）没す。年50なり。

横山雲安（詩二首）

名は仲祥、またの名は玄祥、別号は石癡道人、みずから姓を修して黄氏となし、文辞にはすなわち黄仲祥と称す。青藍の男、画を風外禅師に学ぶ。のち東京に住し、渡辺小華・椿椿山とあい切劔し、もっとも山水を善くす。明治13年（1880）没す。年68なり。

注 ○渡辺小華 1835-1887。華山の子、画家。○椿椿山 1801-1854、

華山の弟子、画家。○雲南とも号する。横山耐雪「跋黄仲祥花卉翎毛画篇」(剪誌七)。画人伝・人名事典。

平賀静遠(詩四首)

名は信順、字は君昌、松江藩の大夫、詩を雨森精翁・釈苔洲に学ぶ。明治16・7年の交没す。年70ばかり。

注 ○明治13年、松江で雑誌『風月小誌』翌年『風流新誌』刊行、(宮武外骨「新聞雑誌関係者略伝」六九(日本古書通信三五七)。『投竿堂資料集』三。

根岸小石(詩二首)

松江の藩士、刀槍弓馬に精しく、兼ねて経史に通ず。藩中の子弟、従い遊ぶ者多し。明治23年(1890)没す。年74なり。

秦松園(詩三首)

名は世寛、松江の人、医をもって業となし、詩を広瀬淡窓に学ぶ。その「山中秋夕」は人口に膾炙す。明治15・6年の交没す。年70ばかり。

注 ○広瀬淡窓 1782-1856、豊後日田の人、教育家、漢詩人。○「山中秋夕」は詩綜に収める。七言絶句。

松本古堂(詩一二首)

名は元裕、字は子龍、また古風道人・尺木氏・錦江鷗史・八雲外史等の号有り。森山村の人、亀井昭陽・摩島松南・安積良斎・梁川星巖等に從いて学を受く。千家・北島二氏聘して、学を杵築に講ず。のち西園寺氏の聘に應じて、学館を京都に創む。また村松の藩学を督す。晩年、伯州の渡村に僑居す。明治11年(1878)没す。年61なり。著に『日本魂諷詠詩』『嗚呼楼詩草』等三十九種二百余卷有り。

注 ○亀井昭陽 1773-1836 筑前福岡の藩儒、古文辞学派。○摩島松

南 1791-1839、京都の学者。○安積良斎 1790-1860、陸奥安積の人、昌平校教授。○梁川星巖 1789-1858、美濃の人、江戸、京都で漢詩人として盛名があった。○千家・北島二氏 出雲国造家。大社の祭祀をつかさどる。○西園寺氏 公望。1849-1940、明治の元勳。○学館 立命館。いまの立命館大学の前身。○北島貴孝「松本古堂頌忠碑」（儒林伝）。儒林伝・百傑・人名事典。

内村鱸香（詩一三首）

名は篤柴、字は子輔、また倉山と号す。松江の人。学を海屋・小竹に受く。のち茗鬻に入りて一斎・良斎に従い遊ぶ。藩侯録して儒官となす。晩年、家塾を開きて相長舎という。前後門に入る者二千五百人なり。明治34年（1901）没す。年81なり。

注 ○海屋 貫名氏、1778-1863、阿波徳島の人、書家として著名。○小竹 篠崎氏、1781-1858、大坂の学者。○茗鬻 昌平校、お茶の水にあったのでこういう。○一斎 佐藤氏、1772-1859、美濃の人、昌平校の儒官。江戸の儒者の重鎮。○相長舎 いまの末次公園の地にあり、公園内に記念碑がある。○詩集を『倉山堂詩鈔』といい、池田素軒の編集で、剪誌三九から六四まで10回にわたり連載された。素軒は索軒の誤り。重野成斎「内村鱸香墓碑銘」（剪誌三九・儒林伝）、内村子深「内村鱸香先生六十一述略」（剪誌四六）。十二家・画人伝・儒林伝・百傑・人名事典・学芸史。

錦織碧湖（詩一首）

名は周泉、今市の人、医を業とす。明治15年（1882）没す。年61なり。

注 ○続医家列伝。

雨森精翁（詩二〇首）

名は謙、字は君恭、また精斎・鶯山・老雨等の号有り。松江の人。初め田村

寧我を師とし、のち小竹・東咳に従う。また茗覺に入りて一斎・良斎諸家の称許する所となる。国学の教授に任ぜられ、藩侯及び世子の師傅を兼ね。維新ののち、日御崎の宮司に補され、広島県の大属に任ぜられ、厳島の宮司を兼ね。晩年、湖西の平田に卜居し、家塾を開きて亦楽舎という。明治15年(1882)没す。年61なり。

注 ○東咳 藤沢氏、1794-1864、讃岐の人、大坂で学を講じた。○松江で開いた家塾はいまの内中原小学校の敷地内にあり、記念碑がある。大正10年、剪淞吟社が四十回忌記念詩会を催した。詩は剪誌第二九に収める。その詩文は横山耐雪が編集、『老雨遺稿』の名で剪誌第二一から二八まで連載、さらに信太淞北が「補遺」を作成、六七に載せた。草場船山「雨森老雨碑銘」(剪誌三・四・儒林伝)。十二家・儒林伝・百傑・人名事典。

中村笠山(詩一四首)

名は彝、広瀬の人、文政五年(1822)生る。年60余にして没す。

桃翠庵(詩三首)

名は世文、字は君章、侍医阪根大曄の次子、桃黄園没してその子なお幼なり。よりて翠庵を養いて嗣となす。のち藩学教授たり。

山本氷川(詩二首)

名は良臣、字は聖徴、鷗寮の子、父に継ぎて医学教授たり。

槇説山(詩三首)

松江の人、書肆を業とし、一年舎と号す。明治15・6年の交没す。年60余なり。

海野晋堂(詩一首)

信太実光の三男、名は崇之、字は子勲、紫瀾養いて子となす。慶応四年(1868)

没す。年44なり。

松原路・赤木方・北尾綸・中村敬勝・田代遜・本田彝・梶美・神谷脩・高井信忠・林忠之・小川有本・安井導路・早川仲成・高木徳方・上川正寛・間島政信・古城時学・神谷篤・奥田周

注 ○以上一九人は伝が無く、「奉賀君公進官」の詩各一首を収める。最初の松原路の詩の題下に安政丁巳（四年・1857）の注がある。すべて同時の作と思われる。桃翠庵その他の条にも「賀君公進官」の作があり、やはり同時の作であろう。この時の松江藩主は一〇代定安。この年、四月二八日、大阪警備を命ぜられ、侍従から左近衛少将に昇進した。

山本惺室（詩一首）

名は子順、順三郎と称す。知井宮の人、伊藤宜堂・広瀬旭荘・劉石秋等に師事し、経史詩文を治す。明治14年（1881）没す。年56なり。

注 ○広瀬旭荘 1807-1863、淡窓の弟、清の愈樾は日本第一の漢詩人とした。○劉石秋 1796-1869、日田の人、漢詩人。

村上琴舎（詩一首）

名は正雄、松江の人、和歌を善くす。明治39年（1906）没す。年81なり。

注 ○村上琴屋の父。

积雲照（詩一首）

名は大雄、俗姓は渡辺氏、東園村の人、東京に住す。近代の名緇なり。明治42年（1909）没す。年83なり。

注 ○百傑。

広沢積善（詩一首）

名は三慶、小石元瑞に従いて医を学ぶ。木次に住し、詩書を善くす。

注 小石元瑞 1784-1849、大阪の医師、頼山陽の親友で主治医、その妻梨影の養父。

千原天谷（詩一首）

名は徳、字は復撲、秀斎と称す。仁多郡布勢の人、広瀬淡窓・小石元瑞に従学す。明治35年（1902）没す。年77なり。

妹尾采蘋（詩一首）

鵜飼渚の女、詩を善くす。

沢野含斎（詩六首）

名は脩、字は詢叔、松江の人、雨森精翁・安積良斎・頼支峰・藤沢東咳に従学し、藩主および世子の侍読たり。晩に家塾を開き、培塾という。明治36年（1903）没す。年76なり。著に『含斎詩存』有り。

注 ○頼支峰 1823-1889、山陽の子、家学を継承。 ○含斎詩存 一卷、明治39年井川冽・渡辺寛一郎編纂発行。 ○重野安繹「沢野含斎碑」（含斎詩存・剪誌六・儒林伝）碑は床几山に現存。人名事典。

松田秋水（詩一首）

名は信道、明治35年（1902）没す。年84なり。

金本摩斎（詩四首）

名は桐観、字は善卿、顕蔵と称す。高松村の人、伊藤宜堂・貫名海屋・篠崎小竹に従学し、伊丹に教授す。のち京師に寓して、勤王を唱う。明治2年に刺客の横井小楠を殺すあり。事は摩斎に連なる。獄に繋がるること4年にして没す。年43なり。著に『楽山堂詩鈔』『皇道要略』等、他数種あり。

注 ○善卿 善郷に誤る。楽山堂詩鈔によって正した。 ○教授為伊丹伊丹に教授すの原文はこうなっているが、為は於の誤りであろう。 ○楽

山堂詩鈔 島根大学付属図書館所蔵。四巻、補遺一卷、明治2年・長古堂蔵板。○詩綜収録の詩数は少ないが、百韻（二百句）一首を含む長編の力作ぞろいである。清の愈樾の作った日本人の漢詩の選集『東瀛詩選』に出雲の詩人でただ一人選ばれている。藤沢南岳「金本摩斎碑」（儒林伝）。人名事典・学芸史。

桃節山（詩三首）

名は好裕、字は君綽、侍医杉貞庵の二子、桃翠庵養いて子となす。学を雨森精翁・佐藤一斎・横井小楠に受けて、藩侯及び世子の師となる。明治8年没す。年44なり。

注 ○横井小楠 1809-1869、熊本の人、維新前後の開明思想家。○その詩は『節山詩鈔』の名で、杉原如如編集により、剪誌二九・三〇集に連載する。大正14年に剪社が五十年祭を挙行、剪誌七四を記念特集号としている。雨森精翁「桃節山墓表」（剪誌七四・儒林伝）。谷口廻瀾「桃節山先生略伝」（剪誌七四）。人名事典・学芸史。

永田眷斎（詩一首）

名は穂積、松江藩の儒官、明治32（1899）年没す。年68なり。

森脇松陵（詩一首）

松江の人、詩を釈苔洲に学び、篆刻を善くす。

秦緘斎（詩三首）

名は信美、のち益男と改め、淡路と称す。塩冶村の人、伊藤宜堂・広瀬旭荘に従い、広瀬青村・長三洲・柴秋村等とあい研鑽す。帰郷して塾を開き徒に授く。詩を善くし、墨竹に工なり。明治39年（1906）没す。年73なり。

注 ○広瀬青村 1819-1884、淡窓の養子、維新後は東京で学を講じた。
○長三洲 1833-1895、日田の人、詩書画三絶と称された。○柴秋村

1830 - 1871、阿波藩儒。

松原雪鷗（詩一首）

名は見龍、仁多郡温泉村の人、鴻雪爪に従学し、松江宗泉寺に住す。大正7年没す。年85なり。

注 ○『雪鷗全集』一冊。大正6年、樸大仙等編纂、松陽新報社刊行。

伊東停雲（詩一首）

名は博教。字は民卿、天保六年生まる。弁護士。

坂本蘭窓（詩二首）

名は世敬、字は士直、また耕雲と号す。松江の人、世子の侍講たり。また監軍をもって征長・秋田の諸役に従う。晩年、家塾を開きて、学半舎という。男の有隣は越後の新発田に移住す。明治43年（1910）没す。年73なり。

尾原蘭園（詩一首）

浜右衛門と称す。松江藩の臣、船を監造す。明治14年（1881）没す。年58なり。

高橋融齋（詩一首）

名は一、また勸善齋と号し、塾を不得已学舎という。天保七年（1836）生る。

山村勉齋（詩一〇首）

名は良行、字は聞伯、良頭の孫、塩谷宕陰・大沼枕山に就きて業を受け、また山田方谷と交わる。広瀬の藩学教授たり。明治40年（1907）米子の寓居に卒す。年72なり。著に『四書五経磨鏡録』その他数種あり。

注 ○塩谷宕陰 1809 - 1867 昌平校の教授。 ○大沼枕山 1818 - 1891、維新前後の漢詩壇の領袖。 ○儒林伝の著者、谷口廻瀾の父。島根県立図

書館に『勉斎遺稿』三巻を蔵する。並河理二郎編集発行、大正8年。藤沢南岳「山村勉斎碑銘」(剪誌七・儒林伝)。山口習堂「山村勉斎墓銘」(儒林伝)。『広瀬藩儒山村勉斎覚書』 山村良夫、飯塚書房、昭和53年。儒林伝・百傑・人名事典。

樋野含斎(詩一首)

広瀬藩の儒臣。

村田寂順(詩二首)

松江藩士、僧となり、大僧正に進み、妙法院門跡たり。明治38年(1905)没す。年68なり。

注 ○天台座主。 ○百傑・人名事典。

黒田青龍(詩一首)

名は貫、字は龍二、下分村の人、弱冠にして芸備二州に遊学し、のち雨森精翁に従う。学成りて惟を三分市村に下す。明治19年(1886)没す。年48なり。

注 ○惟 帷の誤り。

积弘軒(詩一首)

名は因成、また省試斎と号す。松江真光寺の僧、学を雨森精翁に受く。明治29年(1896)没す。年58なり。

注 ○役 没の誤り。

渡部翠園(詩一首)

名は喬及、字は潤一、松江の儒士、槍術を善くす。明治15年(1882)没す。年43なり。

北尾漸一郎(詩一首)

天保十一年（1840）生まる。松江藩の侍医、一時の名医、多納光儀、田代嚮平と名を斉しうす。のち居を東京に移す。

注 ○田代嚮平 医家列伝。○医家列伝の田代嚮平の条によると、北尾は明治2年、藩立医学校教授に並びに付属病院長。

勝田睡仙（詩四首）

名は紹興、字は君幹、松江の世臣、家はすこぶる富む。佐川玄玄・平賀楽之・林原蕉窓・永井桐陰・高木中原・中山石逕・生田晚樵等と社を結びて唱和す。

林原雀窓（詩一首）

通称は常次郎、松江の人。

注 ○前項の蕉窓と同一人であろう。

高橋春流（詩一首）

松江の人、英学を善くし、渡辺洪基とともに学ぶ。晩年詩酒に逃れ、作る所はなはだ多し。今はすでに散佚せり。

注 ○渡辺洪基 1848-1901、越前の人、帝国大学総長、貴族院議員。

天野瓦全（詩一首）

長崎翠山（詩一首）

名は堅造、平田の人。

水谷溪窓（詩二首）

国富の人。大正9年没す。年80なり。

滝川清瀾（詩三首）

名は資則、奎之丞と称す。松江の世臣、天保十三年（1842）生まる。

注 ○滝川亀太郎（君山）の父。

吉岡星秋（詩七首）

名は弘、字は万夫、沢野含斎・雨森精翁に従学し、また詩を苔洲・枕山・黄石・松塘諸氏に学ぶ。松江藩の行人となり、みずから士族を辞し、藩主に説きて藩籍をもって奉還す。東京に移り住み、のち静岡・高知・鹿児島 of 裁判所長を歴任す。明治25年（1892）没す。年51なり。

注 ○黄石 岡本氏、1811-1898、彦根藩の家老、維新後は漢詩人。○松塘 鈴木氏、1823-1898、維新前後の漢詩人。○画人伝。

松原清風（詩一首）

通称は操造、天保の末年に生まる。松江藩の世臣なり。

相見淞雨（詩一首）

松江の人、篆刻を善くす。明治24年（1891）没す。年48なり。

注 ○美術学者相見香雨の父。

永井桐陰（詩一首）

名は卓一、松江市参事会員、大正4年没す。年72なり。

森山緑園（詩二首）

通称は白十郎、塩冶の人、弘化二年（1845）生まる。学を伊藤宜堂に受く。

注 ○剪社社員。

松田淞雨（詩一八首）

名は敏、字は訥卿、松江の人。弘化二年生まる。雨森精翁・沢野含斎に従学し、詩を苔洲・枕山・松塘・黄石に学び、吉岡星秋と並称さる。大原郡長たり。遷りて浜田・横浜の典獄に転ず。晩年東京に住し、文墨をもってみずから娛し

む。

注 ○剪社名誉社員、大正12年没。著書『禹域遊草』大正4年、馬庭義雄編刊は大正2年、中国旅行の詩を集めたもの。

勝部其樂（詩五首）

名は貫一、字は子敬、弘化三年（1846）生まる。大津の人、家塾を開きて包蒙館という。千代延穰堂・伊藤盤南等と詩社を結び、青垣吟社という。

注 ○剪社名誉社員。百傑・人名事典。

安井滌斎（詩三首）

名は泉、弘化三年生まる。松平氏の家令。

注 ○茶人としても著名。大正13年（1924）没す。島根県立図書館に『滌斎詩存』二巻を所蔵。昭和8年、安井淳之助編集発行。剪社社員。

武島合六（詩一首）

名は直、また天骨と号す。杵築の人、篆刻を善くす。のち東京に住し、大正3年（1914）没す。年69なり。

飯塚西湖（詩一〇首）

名は納、字は伯通、弘化四年（1847）生まる。松江の人、のち東京に住す。明治の初め、命を奉じて仏蘭西（フランス）に留学し、法律を修む。帰朝ののち、志を得ず、詩を賦してみずから娛しむ。

注 ○平生、五言律詩のみを作った。西湖はスイスのレマン湖にちなむ。アメリカ婦人を妻とする。異色の明治人の一人。『西湖四十字詩』は汲古書院詩集日本漢詩卷二〇に影印。

石橋穆庵（詩一首）

名は信堅、号は天香、通称は孫八、宮原易安・沢渡精斎に従い、また釈天鱗・

雨森精翁・根本通明・鳥尾得庵等に就きて、詩及び易を学ぶ。衆議院議員たり。
大正4年(1915)没す。年69なり。

注 ○根本通明 1823-1906、出羽の人、帝国大学教授。易学の大家。

○鳥尾得庵 1847-1905、長門の人、陸軍中將、貴族院議員。仏典に造詣が深かった。

平賀静所(詩一首)

通称は勝三郎、静遠の弟。

三木春帆(詩一首)

名は敬、松江の人、詩を天鱗に学ぶ。のちのち西京に住す。

太田蕉窓(詩一首)

名は義和、字は公利、通称は春造、松江の人、十六島の村長なり。

紫酔月(詩一首)

松江西光院主、弘化四年生まる。年60余なり。

巻 五

西山荻村(詩一首)

名は重常、字は士常、関一郎と称す。川迹村の人、伊藤宜堂・広瀬林外に従学す。また神戸洋学館に英学を修め、松江病院長に任ぜらる。のち衆議院議員たり。明治35年(1902)没す。年55なり。

注 ○広瀬林外 1836-1874、旭荘の子、淡窓の塾の後継者。 ○人名事典。同書は『出雲市誌』により、明治36年没。年56とする。

井川収軒(詩一五首)

名は冽、字は泉卿、嘉永二年（1849）生まる。松江の人、沢野含齋に従学し、北海道開拓に従事す。仁多郡長たり。のち東京に住す。

注 ○剪社創立時の社員、仁多郡長の時、来遊した大町桂月の前で一首を作り、桂月を驚かせた。（大町桂月「簸の川上」）

内田措宜（詩一首）

名は誠也、培塾の都講、若槻守拙と名を斉しゅうす。明治27・8年の交に没す。

熊谷松峰（詩一首）

名は宜篤、広瀬の人、陸軍少将、大正9年（1920）没す。年72なり。

注 ○明治39年退役（帝国陸軍將軍総覧）。

大森柔直（詩一首）

通称は莊之助、嘉永二年生まる。大塚の人。

注 ○剪社社員。

松田琴潭（詩二首）

通称は小太郎、嘉永二年生まる。赤名の城主、松田左近の裔なり。朝山村に住す。

注 ○剪社社員。昭和2年（1927）没。

若槻守拙（詩三首）

名は敬、松江の人、雨森精翁・沢野含齋に従学し、島根・能義・仁多の郡長を歴任す。明治35年没す。年53なり。

注 ○総理大臣若槻礼次郎の母方の叔父で養父、島根大学附属図書館桑原文庫に詩集『槻陰遺稿』一冊を所蔵する。明治36年、東京若槻礼次郎発行。

山口松陵（詩七首）

名は宗義、松江の人、嘉永四年（1851）生まる。日本銀行理事。

注 ○晩年は永井荷風の父禾原等とともに、東京漢詩壇の有力な後援者。蔵書に富み、旧蔵書は島根県立図書館に寄贈され、山口文庫として公開されている。中国・日本に渡って、漢詩に関する貴重書が多い。昭和9年（1934）没。

佐川重玄（詩二首）

名は環、松江の人、釈天鱗に従学す。のち東京に移る。

注 ○前巻の勝田睡仙の条に見える佐川玄玄と同一人。詩綜目次は玄玄、本文見出しは重玄。剪社社員。

但見醒処（詩二首）

順八郎と称す。安来の人、嘉永四年生まる。

注 ○剪社社員。

井川双岳（詩八首）

名は精一、津和野の人、松江に住し、簸川郡長たり。明治43年（1910）没す。年56なり。

注 ○大阪市立大学学長・法律学者恒藤恭の実父。剪社初期の社員。

三島睡雨（詩七首）

名は祭、松江の人、詩を釈天鱗に学ぶ。松江銀行の頭取たり。明治43年没す。年59なり。

注 ○剪社創立時の社員。

毛利梁涯（詩一首）

名は元茂、松江の人、大原郡長たり。書を能くす。

注 ○通称は八弥、弘化二年（1845）生れ、大正8年（1919）没す。松江きっての名書家といわれた。人名事典。

山本醒軒（詩二首）

字は剛実、堅助と称す。醒室の男、内村鱸香に随いて経史を修め、詩及び書を善くす。大正8年没す。年67なり。

河合篤敬（詩一首）

嘉永七年（1854）生まる。松江師範学校の教諭なり。

和田容斎（詩二首）

名は義雄、松江の人なり。

中村鶯山（詩二首）

名は準、字は子繩、松江の人、八束郡の視学、詩書篆刻を善くす。明治35年没す。年50なり。

松原瑜洲（詩五首）

通称は新之助、松江の人、水産講習所長たり。東京に住し、茶儀を嗜む。大正5年（1916）没す。年64なり。

注 ○松江市赤山の茶室明明庵は、松平不昧の建てたものを、瑜洲が東京に移し、のちまた松江に移されたもの。人名事典。

米田香洲（詩二首）

名は事、天鱗に学びて、詩を善くす。大正2年（1912）没す。年52なり。

渡部桃蹊（詩一首）

名は寛、字は子栗、松江の人、安政二年（1855）生まる。学を沢野含斎に受

け、修道館長たり。のち浜田女学校長となる。

注 ○通称は寛一郎。昭和13年（1938）没す。剪社創立時の社員。村上琴屋の没後、第二代（最後）の社長。若槻礼次郎の親友で、後援会長。十二家。信太淞北「清福集序」（剪誌六）。人名事典。

兼本春篁（詩一首）

松江の人、画を直入に学び、山水を善くす。安政二年生まる。

注 ○直入 田能村氏、1818-1907、豊後竹田の人、竹田の養子、画家。

有田可耕（詩一首）

名は伝助、松江の人、安政二年生まる。

高橋菊径（詩一首）

名は義比、安政二年生まる。松江の人、内村鱸香に従学す。松江市長なり。

注 ○のちに幹事となり、後期の剪淞吟社を支えた。昭和13年没す。島根県立図書館に、『菊径詩存』一冊を所蔵する。昭和14年、松江高橋中発行。人名事典。

山本白水（詩一首）

名は正功、字は養叔、良次郎と称す。官は能義郡長たり。

注 ○剪社社員。

飯島半村（詩一首）

名は興基、松江の人なり。

森翠軒（詩一首）

名は信通、繁之助と称す。松江の人なり。

佐藤静江（詩一首）

名は文、松江の人なり。

西川潜斎（詩一〇首）

名は自省、松江の人、学を内村鱸香に受け、医を業とし、眼科をもって名あり。宅後に多く牡丹を植えて、殿春園と称す。明治45年（1912）没す。年56なり。著に『潜斎遺稿』有り。

注 ○潜斎遺稿 大正2年、西川敏行編纂発行。 ○剪社創立時の社員。

儀満適所（詩一首）

通称は恭造、平田の人、詩を雨森精翁に学び、大坂に住す。

池田素軒（詩二首）

名は健、松江の人、安政五年（1858）生まる。

注 ○倉山堂詩鈔の編者池田素軒は素軒の誤り。剪社社員。

山内淞陽（詩二首）

名は詳、字は鳳翀、また石梁と号す。松江の人、安政五年生まる。

平井梅外（詩五首）

名は克敬、松江の人、大正8年没す。年62なり。

平賀白華（詩二首）

中山石達（詩一首）

名は三寿、松江の人なり。

平賀楽之（詩六首）

名は尚信、字は秀民、静遠の男、亦楽舎の都講、のち松江図書館の司書たり。
大正2年没す。年55なり。

河原静修（詩四首）

字は成章、久多美村の人、安政六年（1859）生まる。

山口習堂（詩四首）

名は美道、字は君従、広瀬の人、万延元年（1860）生まる。山村勉斎に従学し、文章を善くす。著に『山中幸盛伝』有り。

注 ○山村勉斎の女婿。昭和3年（1928）没す。儒林伝勉斎の条に附載。

安食夢仙（詩一首）

久和之丞と称す。松江の人なり。

青山松琴（詩一首）

名は久、松江の人、官は能義郡長たり。万延元年生まる。

注 ○剪社社員。

並河適処（詩三首）

理二郎と称す。万延元年生まる。安来の人、県会議長たり。また衆議院議員なり。

注 ○剪社社員。大正15年（1926）没す。実業家。島根県立図書館に『適処遺稿』一冊を所蔵する。昭和5年、並河波蔵編集、並河秀夫発行。波蔵は適処の弟、独尊と号して、同じく詩を善くした。島根県立図書館に『独尊遺稿』一冊を所蔵する。昭和10年、並河隆編集発行。谷口廻瀾「並河適処翁伝」（剪誌一〇七・適処遺稿・儒林伝）・百傑・人名事典。

松崎水幹（詩一首）

字は子直、万五郎と称す。松江の人、沢野含斎に従学し、文章を善くす。明治15年没す。年20なり。

村上琴屋（詩二一首）

名は寿夫、字は仙齡、文久元年（1861）生る。松江の人、隱岐の島司たり。詩を平賀静遠・雨森精翁に学び、のち森槐南に就正して、格調一変す。剪淞吟社を創む。

注 ○森槐南 1863-1911 明治第一といわれた漢詩人、清詩を鼓吹して絶大な人気があった。明治36年、出雲に来遊、剪社創立の端緒を作った。

○晩年は松平伯爵家（旧松江藩主）の家令として東京に住み、維新前後の松江藩史の研究をしている。剪淞吟社初代社長。琴屋・横山耐雪・藤脇松軒を出雲漢詩の三大家という。昭和7年（1932）没す。彼の死が剪社崩壊の引き金となった。雑誌島根評論第九九号は琴屋追悼特集号である。『琴屋詩存』二巻、昭和13年、村上岐夫発行を伝える。館森袖海「宝杜詩龕」（剪誌八五）・十二家・人名事典。

佐藤半農半仙（詩一首）

名は彝経、字は雲従、松江の人、文久元年生まる。

高木中原（詩一首）

範之丞と称す。松江の人。

注 ○前卷勝田睡仙の条に名が見える。

中島秋圃（詩七首）

通称は謹蔵、吉岡星秋の弟、文久二年（1862）生まる。沢野含斎に従学し、医をもって業とす。

注 ○剪社創立時の社員。医家列伝、同書には安政三年（1856）生まれ、大正15年（1926）没とする。

山田湖南（詩二首）

名は孝道、広瀬の人、文久三年（1863）生まる。仏教大学林の教頭なり。

福間復軒（詩一首）

名は啓、字は士毅、木次の人、元治元年（1864）生まる。学を沢野含齋に受く。

注 ○剪社社員。

森広操軒（詩二首）

名は源、大津の人、文久二年生まる。

注 ○剪社社員。

柳多湖塘（詩一首）

松江の人、元治元年生まる。岐阜中学校教諭なり。

長谷川伯水（詩一首）

名は乙、西川潜齋の弟、元治元年生まる。母里に住す。

安部硯雲（詩一首）

名は栄、横田の人、慶応元年（1865）生まる。

注 ○横山耐雪が、自分と硯雲の唱和詩を集めた『木堤唱和集』を明治35年に刊行している。

滝川君山（詩一首）

名は資言、松江の人、慶応元年生まる。第二高等学校教授なり。

注 ○剪社名誉社員。通称は亀太郎、『史記』研究の世界的名著『史記会注考証』の著者。松江北堀町の故居に記念碑がある。晩年、大東文化学院教授、昭和21年（1946）没す。百傑・人名事典・学芸史。

秦良軒（詩一首）

名は顯孝、慶応二年（1866）生まる。松江の人なり。

注 ○剪社社員。

信太淞北（詩一七首）

名は正英、字は子俊、子元の従孫、慶応二年生まる。学を内村鱸香に受く。中津税務署長なり。

注 ○剪淞吟社創立時の社員。中津時代、同地の扇城吟社に加入、その関係で、一時、両吟社は密接な関係を結んだ。横山耐雪死後、幹事となり、吟社を取り仕切った。大正14年（1925）没す。剪誌七〇は淞北追悼特集号。島根県立図書館にその著『淞北夜譚』一冊、昭和2年信太孝発行、を所蔵する。松江に伝わる逸話伝説を、漢文で記したもの。十二家・画人伝。

田代活処（詩四首）

名は習、松江の人、慶応二年生まる。

注 ○医師。剪社社員。松江市殿町の田代医院当主はその孫。続医家列伝。同書は慶応元年生まれとする。

木幡黄雨（詩四首）

名は孝良、宍道の人。沢野含斎に従学し、篆刻に巧みに、松江図書館を創立す。明治42年（1909）没す。年43。

注 ○剪社社員。百傑・人名事典。長男吹月は、島根新聞社長として、島根県文化界の重鎮、また文筆・尺八を善くした。

藤脇松軒（詩一八首）

名は善政、字は子徳、明治元年（1868）生まる。松江の人、詩を渡部翠園に学ぶ。かつて勝間田夢蝶・荒川図南の幕に在り、詩境おおいに進む。官は簸川郡長なり。

注 ○剪社社員。出雲三大家の一人、大正11年（1922）没す。『松軒詩草』一冊、昭和6年、矢島熙編集、藤脇雋夫刊行。横山耐雪「嗚呼詩人藤脇松軒」（剪誌七三）・十二家・人名事典。

安部鳴鳳（詩五首）

名は仙、明治元年生まる。東京に住す。

注 ○昭和前期に東京の詩壇で名を知られ、太平洋戦争の末期に出雲に帰った、安部溟鵬（土屋竹雨『猗廬詩稿』）と、あるいは同一人かもしれぬ。

巻 六

佐藤樸村（詩二首）

名は信寛、周防の人、明治9年（1876）島根県令たり。

清水三板（詩一首）

太郎と称す。山口県の人。明治11年（1878）島根県書記官たり。

富永遂浪（詩一首）

名は空庵、伊予の人、明治16年（1883）、白瀧小学校長たり。

中村蓼坪（詩一首）

静岡の人、明治16年、松江裁判所判事たり。

常松愛軒（詩一首）

石見の人、島根県学務課長なり。

注 ○名は強、字は叔矯、圭山と号する。天保一三年（1842）生れ、明治36年（1903）没。大田の人、詩文集『圭山堂遺稿』一冊。人名事典。

中田古月（詩二首）

名は武雄、明治20年（1887）、松江裁判所判事たり。

金尾藍田（詩四首）

名は稜巖、備後の人、明治33年（1900）島根県知事たり。

注 ○在任中に剪社の前身、鷗鷺吟社が創立された。

井原天游（詩一首）

名は昂、字は千里、土佐の人、島根県知事なり。

注 ○明治35年（1902）来任、在任中に森槐南が来遊、剪淞吟社が創立された。創立詩会に出席している。

久保南陽（詩一首）

名は敏、島根県警部長なり。

浅田柳村（詩一首）

四郎と称す。松江師範学校教諭なり。

片山修堂（詩一首）

名は尚綱、肥前の人、松江中学校教諭なり。

安涵斎（詩一首）

名は水中、朝鮮の人、松江商業学校教諭なり。

注 ○剪社社員。明治36年から38年在社。剪社中、唯一の外国人。

本田思斎（詩一首）

名は嘉種、熊本の人、松江師範学校長なり。

注 ○剪社社員。

伊藤黙齋（詩一首）

名は瀬平、信州高遠の人、松江旅団長なり。

注 ○剪社社員。明治43年少将、松江旅団長、大正4年、中将、予備役。帝国陸軍將軍総覽。

中島岫雲（詩一首）

名は正堅、今市裁判所判事なり。

千代延穰堂（詩二首）

名は聡建、石見の人、隠岐の島司なり。

注 ○剪社社員。

宮本中山（詩一首）

名は可一、杵築中学校教諭なり。

佐藤芝峰（詩一首）

名は重治、鹿児島の人、杵築中学校教諭なり。

河野鸞峰（詩一首）

伊勢太と称す。大分県の人、杵築中学校教諭なり。

伊藤盤南（詩一首）

名は義彦、山口の人、今市女子師範校長なり。

注 ○剪社社員。大正6年、徳島に転勤、昭和5年退官して、郷里の周防熊毛郡田布施町に隠棲、昭和7年、出雲に再遊、紀行文を剪誌一三四に寄せる。

川辺隈南（詩一首）

名は哲哉、鹿児島の人、仁多の郡長なり。